

豆の木は窓のすぐそばだったので、ジャックは、窓を開けて木にとびつき、はしごみたに登つていきました。登つて、登つて、登つて、登つて、登つて、とうとう空まで行きました。すると目の前に、広くて長い道がまっすぐのびていました。ジャックはその道を歩いていきました。どんどんいくと、とてつもなく大きな家につきました。入り口に大きな女の人がありました。

「おはようございます。おばさん」と、ジャックは丁寧にあいさつしました。「朝ごはんを少しいただけませんか」

女のは、

「朝ごはんだつて？ここにいたら、あんたが朝ごはんになつてしまふよ。うちの人は人食い鬼で、男の子を焼いて食べるのが何より好きなんだ。すぐに帰つてくるよ」といました。ジャックはゆうべばんごはんを食べてなかつたので、おなががペニペニでした。「ああ、お願ひ、おばさん。何か食べさせて。昨日の朝ごはんからあと何も食べてないんです。飢え死にするくらいなら、焼かれて食べられた方がましですよ」

——「ジャックと豆の木」より

男の子は出かけました。道は遠くて、歩きに歩かなくてはなりませんでした。やつとのこと、男の子は北風の家につきました。

「ここにちは。この間はよく会いに来ててくれたね」と、男の子はいました。北風は、「やあ、ここにちは。おまえもよく会いに来てくれた。それで何の用だね」と、しわがれ声でいました。男の子は、

「あんたが小屋の階段のところできらつていった小麦粉を返してもらひに来たのさ。うちは貧乏だから、わずかばかりの小麦粉をとられたら、飢え死にするほかないんだ」といいました。北風は、「ああ、小麦粉はないよ。でも、そんなに困つてているなら、このテーブルかけをやろう。『テーブルかけよ、広がれ。ありとあらゆるごちそうを出せ』といえば、すきな食べ物を何でも出してくれる」といいました。

——「北風に会いに行つた男の子」より

とうとう娘は、世界の果てまでやつてきました。お日さまのところへ行つてみると、お日さまはとても恐ろしい人で、小さな子どもをむしやむしや食べていました。そこで娘は素早く逃げだし、お月さまのところに走つていきました。すると、お月さまは、とても冷たくて意地悪な人でした。そして娘に気づくと、「くさいぞくさい、人臭い」といいました。そこで娘はお星さまたちのところへ走つていきました。お星さまは、娘に親切してくれました。

——「七羽のカラス」より